

81

心澄みすべなかりける富士の雪あはきくれなるのちかづくときとみて

やまなかちえこ
山中智恵子

【歌意】心は澄んで、どうすることもできなかった。富士山の雪に「淡い紅」のときが近づくと見えて。

〈鑑賞〉「あはきくれなる（淡き紅）」がいったい何を意味するのは読者一人一人の感性に委ねられています。あえてひらがなでやわらかく表記された「あはきくれなる（淡き紅）」とはいったいどんなものなのか、ぜひ一緒に考えてみてください。

82

富士の姿うつすら見せて父母のいまさぬ盆の月上りくる

ふじおかたけお
藤岡武雄

【歌意】富士山の姿をうつすらと見せて父母のいない盆の月が上ってきた。

〈鑑賞〉お盆は御先祖様をまつる行事です。月明かりに照らされて、富士山がうつすらと見える中、迎え火を焚いているのでしょうか。詩歌を詠むということは、時空を超えた人々と対話をする作業でもあるのです。

83

ふゆき しごほんた ふじ いま あさひさ
冬木のみ四五本立ちて富士は今はるかにほのと朝日差したり

おかい たかし
岡井 隆

【歌意】 冬の木ばかりが四五本立っていて、今、はるか向こうの富士山には、ほんのりと朝日が差し込んでいます。

〈鑑賞〉 冬枯れの木が数本だけ立っている風景の向こうに在る富士山。ほんのりと朝日が差すこの山を作者はどんな気持ちで眺めているのでしょうか。医学博士でもあり、内科医師として愛知県の病院などに勤めた作者の一首です。

84

いち ひめ はし おこころ こう ふじ やまづつ
一の姫とりて走りし雄心を恋ふとき富士は堂々とせり

はば こ
馬場あき子

【歌意】 大切な長女の姫を奪って逃げたという勇気を恋しく思うとき、富士山は堂々としている。

〈鑑賞〉 長女の姫を奪って疾走した、という伝承の雄心を恋しく思うとき、あの頃と変わらない場所で富士山は堂々とした姿を見せている、と詠む一首です。現代を代表する女流歌人の一首です。

85

あたらし あたら かんせつ かんせつ
 新しき冠雪ありてかがやける富士にまむかふ上階に来て

たかしまけんいち
 高嶋健一

【歌意】新しく山頂に雪が降って輝いている富士山と、建物の上に来て真つ直ぐに向き合っている。

〈鑑賞〉作者は、静岡県立大学で教鞭きょうべんをとっていました。静岡県歌人協会会長も

務めた人でした。静岡市足久保に住んでいた作者は「若き日の友いまい

づこ春早き空をひらきて辛夷こいざしかがやく」「てのひらのくぼみにかこふ草蚩

移さむとしてひかりをこぼす」などの歌も詠んでいます。

86

かみかぜ かみかぜ うみ うみ いわま いわま まびおい まびおい ふじた ふじた う う
 神風の海の岩間ゆ真日負ひて富士顕つといふやまとのことば

なかにし なかにし すずむ すずむ
 中西 進

【歌意】神の力による風の吹く海の、岩の間から、美しい太陽を背負う富士山が鮮やかに見えるという、そう表現する大和のことばよ。

〈鑑賞〉神風の吹く伊勢の二見浦の岩の間から、夏至の日には、太陽を背負った富士山が現れてくる。この風土を表現する豊かな大和のことばには、豊かな美しさがある。私たちの大和ことばをもっともっと大事にしていくべきなのかもしれません。

かの冬の冷えはきはまり雪被く富士が見えにし焦土の空に

篠 弘 しの ひろし

【歌意】

あの冬の寒さは本当に厳しかった。雪を被った富士山が見えた。焼け野原となったあの頃、富士山はどのように見えていたのでしょうか。この百人一首にも選

〈鑑賞〉

戦後のあの冬の寒さから、復興を果たした日本。焼け野原となったあの頃、富士山はどのように見えていたのでしょうか。この百人一首にも選出された土岐善麿・窪田章一郎に師事した作者は、大学の短歌会でも活動し、その後、大手出版社で百科事典の編集にもたずさわってきた歌人です。

遠富士と月とが同じ白さにて霞めり麦の熟れつづくはて

石川不二子 いしかわふじこ

【歌意】

遠くの富士山と月が同じ白さで霞んでいる。麦がよく実った畑が続く果てに。

〈鑑賞〉

東京農工大学卒業後、自ら農業を選択し、岡山で酪農を営んだ作者。自然と共に歩み続け、牛や蝶を詠んだ歌も多い作者です。大地から遠富士と月とを眺めています。「同じ白さ」という発見の歌です。百名中、唯一名前に「不二」の文字を持った作者です。

89

恋人よ俺が弱らば告げくれよあしびきの山山ならば富士

佐佐木幸綱

【歌意】 恋人よ。俺が弱ったら告げてくれよ。あしびきの山、山ならば富士だ。

〈鑑賞〉 「あしびきの」は、「山」や「山田」「山鳥」等にかかる枕詞です。「父と

して幼き者は見上げ居り願わくは金色の獅子とうつれよ」「のぼり坂のへ
ダル踏みつつ子は叫ぶ「まっすぐ?」、そうだ、どんだんのぼれ」等の歌
でも知られる作者は四十番の佐佐木信綱の孫でもある、現代を代表する
歌人です。

90

地中銀河と言はば言ふべし富士山の体内ふかく行く寒の水

高野公彦

【歌意】 地下にある銀河と言ふことができるだろう。富士山の奥深く、流れてい

くこの冷たい水のことを。

〈鑑賞〉 富士山周辺にはいくつかの洞窟があります。そこをさらに奥深く流れて

いく水。その輝きと煌きを「地中銀河」という、新しい言葉を創出して

提示している点が見事です。作者の代表作の一首です。